

になることを危惧しているからである。

なお、平成10年3月10日付けで「教養科目途中放棄者の取り扱いについて」が通知されたことは、自由選択の制度的維持のための努力であり、その今後の効果が注目される。

2 調査の具体的課題

(一) 学生の訴える聴講取りの現状

表1は、すべて学年初めの第一学期におけるものである。後期のデータに不備があるとはいえ、大量の聴講取りや抽選は、第一学期において激しい。教室からはみ出し、広い廊下が通れないほど大勢の学生が履修許可を得るために立ち並ぶ。彼らは、授業開始の1週間は語学や体育の実習を除いて次々と聴講許可を求め歩かねばならない。あたかも彼らには、パブクロールならぬ、「聴講取りクロール」ともいべき1週間である。

定員オーバーした授業科目は、以下の表1に集約して掲げたものが全てではない。担当教員の届け出があったものにとどまる。そのため実際はこの数値以上に抽選等が行われている。そのため抽選漏れ人数は表1に見る数値以上に及ぶが、その分は2年次以降の履修希望学生数と相殺できるものと考えた。そして抽選漏れ科目数を当年度新入生の数で除して、抽選漏れ平均科目数を算出してみた。

表1

平成8年度前学期				
聴講希望全員受入	43科目	2777人	平均	65人増
増員、抽選など	56	2535	平均	45人増
増減なし抽選など	1			
抽選・減員	20	-141	平均	7人減
抽選科目抽選漏数	77	14537	平均	189人漏
当年度入学者数	2333人			1人当抽選漏れ平均6.23回
平成9年度前学期				
聴講希望全員受入	33科目	2435人	平均	74人増
増員、抽選など	55	2608	平均	47人増
増減なし抽選など	4			

抽選・減員	15	-143	平均	10人減
抽選科目抽選漏数	74	13399	平均	181人漏
当年度入学者数	2333人			1人当抽選漏れ平均5.74回

平成8年度に比べて、平成9年度の「聴講取りクロール」は、ごくわずかに緩和したが、抽選漏れの多いことには変わりはない。予定定員を超えて全員を受け入れた科目や増員をしてやむなく抽選をした科目があることによって、抽選漏れは定員通りに実施された場合に比べ、平成8年度で2.28回分、平成9年度で2.16回分少なくなっている。つまり定員通りに行っていたら、学生の抽選漏れは平成8年度で8.51回、平成9年度で7.90回に及んでいたであろう。

1年次の半期平均履修科目数は、表2によると語学を含め推計で一人当たり13.65~16.89科目である。これは、履修した科目であり、表1の平均5~6回の抽選漏れを加えると、平均20科目以上の聴講カードを提出していたと推定してよい。語学を除くと、15~18科目程度を提出し、その3分の1、つまり3科目に1科目が聴講漏れになったというのが平均的と推定される。

表2 単位修得率一覧表より、平成6年度分

	履修科目数	通年語学科目数	半年語学科目数	単位取得率
人文学部	24.648	5.512	9.57	15.08 83.07
教育学部	25.313	3.576	10.86	14.44 80.06
法学部	28.970	2.837	13.06	15.90 76.02
経済学部	23.671	3.629	10.02	13.65 71.82
理学部	23.689	3.637	10.02	13.66 76.92
工学部	25.565	3.554	11.01	14.56 76.29
農学部	29.446	4.327	12.56	16.89 75.18
医学部				
歯学部				

以上は教養科目の履修だけのことである。むろん医学部・歯学部以外の学生は1年次より表3のように専門科目も履修している。上の表2でみた平均半期履修科目数に、さらに下の表3で見る専門科目の履修科目数が加わっている。

(二) 各学部学生の専門・教養科目の単位修得状況

周知のように平成5年度以降、専門科目と教養科目の有機的連関の下で4年間の一貫教育を図ることが追求されてきた。

表3は、平成6年度入学生（平成10年3月卒業）の学年進行による単位数の修得状況を示したものである。

表3

人文学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	245	40.26	9.16	49.42
2年次(1995)	243	6.19	35.31	41.50
3年次(1996)	241	7.93	37.59	45.51
4年次(1997)	238	1.19	20.94	22.13
計		55.57	102.99	158.56

教育学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	452	39.66	1.99	41.65
2年次(1995)	450	2.58	41.97	44.54
3年次(1996)	447	1.07	42.77	43.84
4年次(1997)	443	0.45	18.80	19.25
計		43.75	105.52	149.28

法学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	294	36.72	2.88	39.61
2年次(1995)	291	9.35	31.68	41.03
3年次(1996)	291	3.12	29.02	32.14
4年次(1997)	283	2.48	13.22	15.70
計		51.67	76.80	128.47

経済学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	272	28.30	11.86	40.16
2年次(1995)	269	6.66	31.09	37.74
3年次(1996)	265	2.73	29.30	32.03
4年次(1997)	259	2.15	17.96	20.11
計		39.84	90.21	130.04

理学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	218	34.33	9.24	43.57
2年次(1995)	216	8.90	31.86	40.75
3年次(1996)	211	3.33	33.34	36.66
4年次(1997)	207	0.96	17.74	18.70
計		47.51	92.18	139.69

工学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	530	31.72	14.40	46.12
2年次(1995)	524	8.54	31.60	40.14
3年次(1996)	520	2.21	36.73	38.93
4年次(1997)	508	0.68	6.34	7.02
計		43.14	89.07	132.21

農学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	167	37.34	5.34	42.68
2年次(1995)	167	6.56	34.72	41.28
3年次(1996)	165	1.43	39.02	40.45
4年次(1997)	162	0.52	8.19	8.71
計		45.85	87.28	133.12

医学部

年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	100	49.68	0.00	49.68

歯学部

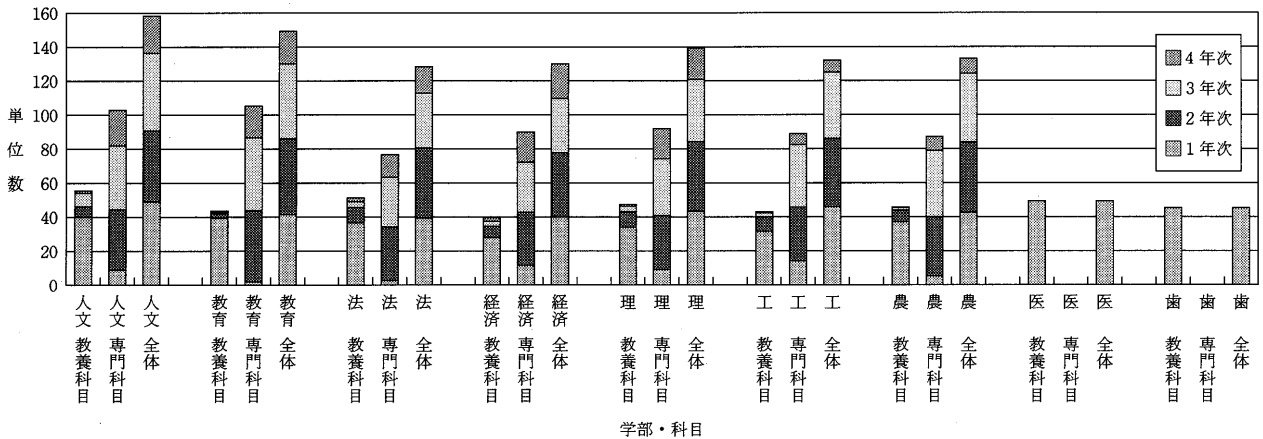
年次(年度)	学生数	教養	専門	合計単位数
1年次(1994)	59	45.41	0.00	45.41

以上をグラフ1でも示しておこう。

人文学部の例をあげて前項までの教養科目の履修科目数に専門の科目数を加算する試算を試みる。

人文学部の例では、専門科目が通年で9.16単位÷2＝4.58科目、これを半期に換算すると、修得率のこともあるので、2.5科目を履修した推計をおこなう。これを教養科目15.08に加えると、およそ17.5科目とな

グラフ1 平成10年3月卒業生の平均単位修得数（学部別）



る。1日平均3.5科目を履修する。つまり3科目の日が週2日、4科目の日が3日履修程度となる。これが平均的学生の履修状況と見てよい。

すなわち平成6年度入学の人文学部生は、1年間で教養科目半期2単位の科目を19科目38単位分と、通年2単位の科目を5.5科目11単位分、それに専門科目半期2単位科目を5科目10単位程度を履修し、単位取得率83.07%で約49単位を修得した勘定となる。

これを単位制との関連で言うと、受けた授業時間半期17.5科目35時間に加え、講義科目の予習復習に2倍の24コマ分48時間、語学の予習復習に1倍の5.5コマ分11時間の計59時間が加わり、学生の1週間の総学習時間は94時間に及ぶはずである。週5日の計算では1日当たり18.8時間、週7日では13.428時間になる。このような履修計画は、率直に言って相当に過密で単位制を形骸化しているといわざるを得ない(4)。

以上は人文学部だけの問題ではない。1年次の単位修得数が39.61と最も少ない法学部の場合でも、半期13科目の教養科目の講義と3科目の語学、1.5科目の専門科目を履修し、修得率76.02%となっている。これは人文学部の学生と同じ、17.5コマである。予習復習時間を計算すると教養科目講義が52時間、語学6時間、専門科目が4.5時間の計62.5時間、授業時間の35時間とあわせた総時間数は97.5時間となり、人文学部学生よりも3.5時間多くなる。

私はまず、このような過密の履修計画から眼を背けるべきではないと考える。過密な履修計画は、そもそも計画とは言えないが、なぜそのようなことが発生するかという問題の根底に、進級や卒業にかかる保険的な

履修や4年次の就職活動や卒論のことがあるであろう。

次に、全学的な合意である4～6年の一貫教育の視点から見てみたい。

教養科目の1年次における取得単位数は、28.30（経済）～40.26（人文）（但し、医学部49.68、歯学部は45.41となっている）、7学部1年次の平均取得単位数は、35.48であった。その4年分のうちの1年次の単位取得比率を学部別で見ると、人文学部72.45%、教育学部90.65%、法学部71.07%、経済学部71.03%、理学部72.26%、工学部73.53%、農学部81.44%、（医学部・歯学部各100%）というように、学部ごとに理念や目的の違いやキャンパス事情があり、もとより一律であるはずもないが、70%程度の5学部と、80%1学部、90%が1学部、100%が2学部となっていた。キャンパス事情のある100%の2学部はさておいて、ここでは1年次の教養科目の単位修得率が、まだまだ高いものとなっていると言わなければならない。高年次の教養科目の開発の課題が依然として大きいことも指摘しておかなければならないだろう。

(三) 開講時間別定員・聴講漏れ数

次の表4は、平成9年度における前期の開講時間ごとの定員数と定員+聴講希望者数、増員受入数、および聴講漏れ数である。なお前期定員53.20%、後期定員46.80%であった。

	定員	希望数	増員	漏数	漏率%
月 I	1770	2202	229	203	9.21
II	2250	3260	341	669	20.52
III	1747	3021	394	880	29.13

IV	1831	3238	347	1060	32.74
火 I	2758	3168	201	209	6.60
II	2984	3070	66	20	0.63
III	2431	3795	501	863	22.74
IV	1775	3297	263	1259	38.19
水 I	2328	2693	54	311	11.55
II	2593	2837	245	0	0.00
III	2106	3269	170	993	30.38
IV	1831	3685	127	1727	46.87
木 I	2396	3013	364	253	8.40
II	2996	3346	273	127	3.80
III	1822	3328	74	1432	43.03
IV	1106	1691	151	434	26.85
金 I	2514	3293	482	297	9.02
II	2730	2910	90	90	3.09
III	2194	4020	322	1504	37.41
IV	1520	3139	532	1077	34.42

表中「希望数」としたのは、定員を超えた科目の希望者数を、定員に単純に加算した数である。

さて、「漏数」（聴講希望漏れ者数の意味）が1000名を超え、希望数の30%を超えている時間としては、6コマある。こうした学生が集中する時間帯に開講科目や定員を増やすなど適正化を図る必要があるが、また学部の専門科目の開講時間とのかね合いも重要である。しかし、今回の調査では間に合わなかったため、今後の課題とせざるを得ない。

3 調査のまとめ

最後に調査のまとめを行って今後の取り組みの課題を明らかにしておきたい。

まず聴講漏れが、学生あたり平均平成8年度で6.23回、平成9年度で5.74回程度となっていたと推定したが、定員を超えて聴講を認めた科目の扱いによって、平成8年度の場合2.28回分、平成9年度で2.16回分が抽選をしなくとも良いことになり、この分が緩和されていたことが明らかになった。このことから明らかになったように、教育効果の問題が深刻にならない範囲での増員の措置を可能な限り講じることが今後とも必要となっている。

第二には、学生の履修科目数が多すぎないか、単位制の趣旨によって計算すると1週間当たり94時間に及ぶはずのものであった。週休2日制40時間と比べてもらいたい。どうせ予習も復習もたいしてしているわけではないから、というのでは出口管理などできるはずがない。各学部の学務・教務担当教員はこの点を単位制とともに学生にどうガイダンスされるのであろうか。

第三に、四年次の修得単位の少なさと、三年次以下の修得単位の多さという極端な偏りをどう見るのか。大きな問題と言わなければならない。これになお、教養科目をほとんど一年次で修得して二年次以降は極端に少なく、専門科目が逆になっていて、あたかも教養部に一年間所属しているかの様相を呈している向きもある。専門科目と教養科目の有機的なカリキュラムへの理念にもかかわらず、なお体をなしているところまで至っていないと言わなければならない。これらの改善が急がれるのではないか。

第四に、しかしなお当面具体的には、教養科目と専門科目との開講時間を有機的に配置する必要がある。特に一年次生向けの専門科目の開講時間を調整していく必要があることを提起しておきたい。

注

- (1) 「新潟大学教育開発研究センターニュース」第5号（平成10年3月）
- (2) 『大学教育研究年報』第一号（平成7年4月）、『大学教育研究年報』第二号（平成8年3月）各掲載の学生による授業アンケートから知られる。
- (3) この語は、学生から見て怠惰にしても組し易い、従って評価の甘い授業科目を指して学生がよく使う用語である。従来は、FDなどがほとんど行われないうまに、各教員の考えにまかせて評価が行われてきたことを示している。
- (4) 館昭「単位制度と大学教育」（本誌特集掲載）

（追記）本報告を成すに当たって、企画室教務係の職員の方たちに調査データを揃えていただいた。また人文学部日本文化講座助手小松彰氏には、グラフを作成するお手数をかけた。記して感謝の意を表したいと思う。